

北斎 かわらばん

第二十四号



諸国名橋奇覧

足利行道山
くものかけはし

「諸国名橋奇覧 足利行道山くものかけはし」(大判錦絵) 天保初年(1833~34)頃

栃木県足利市にある行道山浄因寺を描いたものです。浄因寺は、和銅六年(七一三年)に行基によって開かれた「関東の高野山」と呼ばれる修験の寺です。行基は、奈良の東大寺の建立に関わった人物です。

左側の断崖の上の清心亭と呼ばれる建物に渡るための橋を、北斎は「雲の架け橋」として描きました。実際には雲が下に見えるほど高くはありませんが、たなびく雲や湧き上がる雲によって、北斎は神聖な場所としての寺院の雰囲気表現しています。

現在この場所は、景勝地として栃木県の記念物(名勝)に指定されています。また、右側の断崖には本堂と思われる建物がありますが、現在の浄因寺には、この場所に御堂はありません。画面右下には山門らしきものも描かれています。参道右側の絶壁には石仏を描いたと思われる二本の柱があります

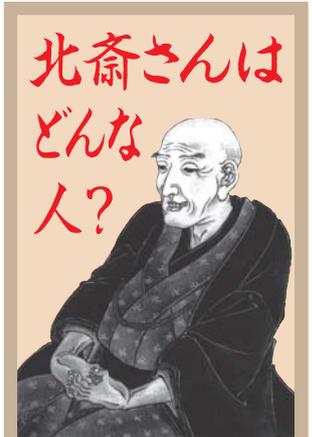
が、現在の行道山は、参道から山頂にかけて三万三千体ともいわれる大小の石仏があることで有名です。

本図を含む「諸国名橋奇覧」は、日本各地の橋を題材としたシリーズで、全十一枚が知られています。「富嶽三十六景」と同時期に同版元の西村屋与八から出版されています。「富嶽三十六景」が場所や季節によって様々に変化する富士山を描くことに主眼を置いたのと同様に、本シリーズでも橋の構造や形の面白さに着眼して橋を様々に描き分けることを目的として出版したといえます。



【発行】
墨田区区民活動推進部
文化振興課
北斎美術館開設担当
(墨田区役所1階)
△03-5608-6115
【編集協力】
(公財)墨田区文化振興財団
北斎事業課

外国の人々に「Big Wave」と呼ばれて人気の「神奈川沖浪裏」(図3)は、「富嶽三十六景」シリーズを代表する名作のひとつです。
この絵の最大の魅力は、大胆で奇抜な構図です。巨大な波と荒波にもまれる舟を絵の前の方に置き、富士山を奥の方に据えることで、空間の奥行きや富士山の安定した存在感を強調しています。絵の手前に描くものを大胆に拡大し、奥に描くものを遠く小さく描く絵の構図は、北斎がいち早く名所絵(風景画)の描き方に取り入れ、その後につづく浮世絵師に大きな影響を与えました。



三十年かけて
北斎は
いろいろなことに
チャレンジ
しました



波を極めた人として
紹介します
今回は
を
極めた人

「Big Wave」の大胆奇抜な構図

約三十年かけた進化



図1 「賀奈川沖本杵之図」(44~47歳頃)

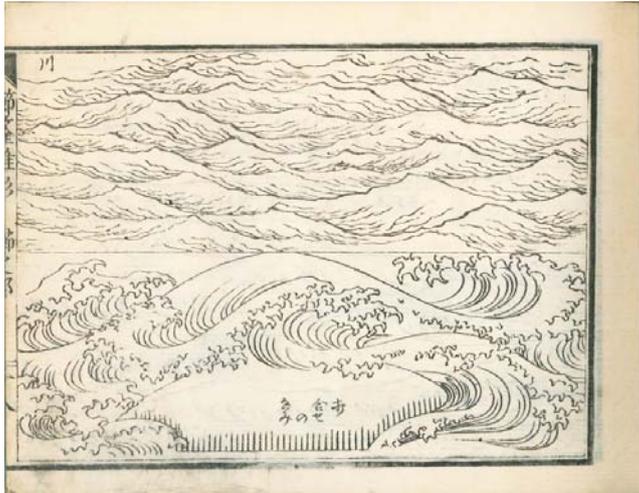


図2 『今様櫛篋雛形』(62歳)



図3 「富嶽三十六景 神奈川沖浪裏」(71歳頃)

「神奈川沖浪裏」は、北斎が七十一歳頃の天保二年(一八三二年)頃に刊行された絵ですが、手前に大きな波を描くこの構図自体は、それよりも三十五年ほど前、北斎が三十六歳頃にすでに登場し

ています。
この頃北斎は、江戸時代に流行した狂歌という短歌を載せた絵本の挿絵や、仲間内で配る摺物すりものという版画で、大波の構図をいろいろと試してみました。その後、西洋の絵の表現を取り入れた風景の版画で、大波の表現を使っています。

なかでも「賀奈川沖本杵之図」(図1)は、富士山こそ描かれていませんが、大波と荒波にもまれる船の構図が、「神奈川沖浪裏」によく似ています。北斎は本図を描いて、たとえられる頃に、千葉県の木更津方面を旅しており、そこで見た荒々しい波の光景も参考にしていたのかもしれない。さらに読本という小説の挿絵や絵手本などで波の表現を磨き(図2)、七十一歳頃になつて、波に鉤爪かぎつめのような鋭い波頭を加

えて、迫力を増し、藍色を中にシンプルな色合いにまとめた「神奈川沖浪裏」を発表しました。
このように、北斎はまた若い頃に作り上げた波の絵の構成を、長期間により良い方向作り変えて行き、その総まとめとして名作「神奈川沖浪裏」を作りだしました。努力を重ねて生まれた絵だからこそ、今も多くの人を感動させるのでしよう。

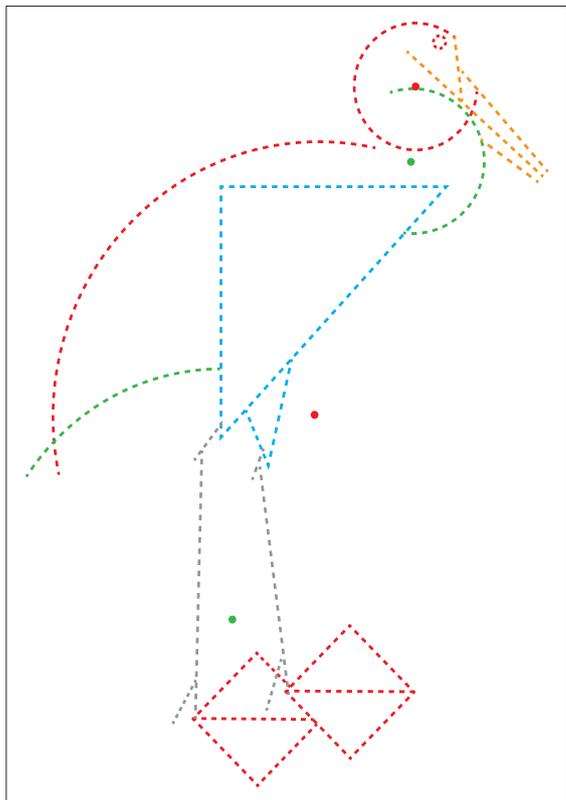


前回まで丸を使って絵を描く方法を紹介してきました。今回は丸だけでなく、三角や四角も使って鶴を描いてみましょう！お手本は前回と同じく『略画早指南』です。

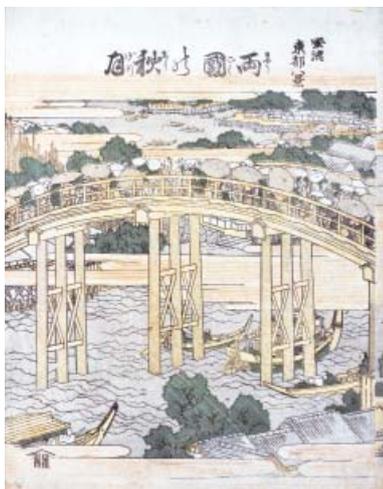
鶴を描こう

で形をとります。頭から首にかけての羽毛と背中の中の羽根を描き込み、①を参考に細かい部分を描き込めば出来上がり。頑張って挑戦してみましよう。

- ①に「ひし形を使わず丸と三角」と四角で鳥を描く方法」、②には「鶴も鷺も同じ方法で描ける」という意味の言葉が書かれています。



江戸時代の両国橋は、現在の位置よりも五十メートルほど下流に架けられていました。架橋のきっかけが、明暦三年（一六五七年）に起きた明暦の大火でした。橋がなかつたことで、多くの人が逃げ遅れ、大惨事につながった反省から、幕府は防災のため、隅田川に橋を掛けました。また、橋の袂には火除け地が作られ、恒久的な建物は許可されず、可動できる小屋掛けの見世(店)だけが営業を許されました。そのことがかえって、大道芸や見世物など、多くの興行が行われることとなり、寺(の



「風流東都八景 両国の秋月」

橋の上は大混雑

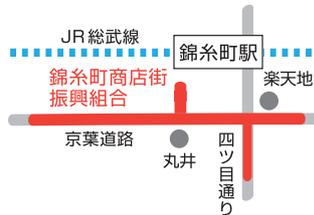
参詣者のみならず、遊びに興じる人たちまでも引き付けたため、江戸の中でも交通量の多い橋のひとつとなりました。寛保二年（一七四二年）に行われた幕府の調査では、一日に二万人以上がこの橋を渡つたとされています。北斎は、両国橋をいくつか描きましたが、北斎が描く両国橋は、季節や時間にも関係なく、人て溢れている作品が多く、北斎も橋の上を頻繁に行き来したのかもしれない。

すみだと北斎

葛飾北斎と商店街が融合!

平成26年2月から3月にかけて、墨田区内の商店街において、葛飾北斎をテーマとしたイベントやバナー掲示が行われ、地域一帯が北斎作品で彩られました。

<錦糸町商店街振興組合>



錦糸町商店街振興組合では、北斎をテーマとした様々なイベントを実施しました。商店街において、北斎作品をデザインしたバナーを掲示したほか、JRAウインズ錦糸町や丸井錦糸町店では北斎作品をパネルで紹介しました。また、錦糸町の伝統でもある河内音頭や落語も北斎作品とともに披露しました。

<キラキラ橋商店街>

キラキラ橋商店街では、商店街付近に位置する田丸神社と北斎の代表作品「富嶽三十六景」シリーズの各作品とを連携させたバナーを制作し、商店街に北斎ギャラリーを展開しました。



<地蔵坂通り商店会>



地蔵坂通り商店会では、梅の名所として親しまれている向島百花園で開催された梅祭りのバナーに、北斎が描いた絵手本『画本早引』の中に描かれている絵をデザインし、掲示しました。



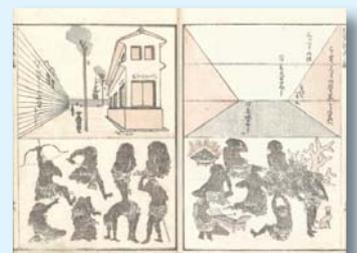
【北斎関連展覧会のご案内】

「のぞいてびっくり江戸絵画 —科学の眼、視覚のふしぎ—」展 —サントリー美術館

江戸時代後期の日本には、顕微鏡や望遠鏡など「視覚」に対する従来の常識を一変させる光学装置が海外からもたらされました。西洋の遠近法を用いた風景図や、顕微鏡による知見を取り入れた拡大図なども生まれ、江戸絵画は大きな変革期を迎えます。本展では、こうした江戸時代後期に花開いた新しい視覚文化について、当時描かれた様々なジャンルの作品を通して紹介します。

本展では、北斎の代表的絵手本『北斎漫画』も展示されます。

※展示替えあり 『北斎漫画』三編(浦上満氏蔵)



■会期 2014年3月29日(土)~5月11日(日)

■問い合わせ ☎ 03-3479-8600